



このレポートは、私・和仁が毎月のコンサルティング活動や日常生活を通して気づき、学ばせて頂いたことを書き留めたものです。
お気軽にご笑読頂ければ幸いです。

【今月の気づき】

『あなたにとっては小さなことが、

相手にとってはスゴイこと。』



レポートBECCA

自分にとっては当たり前のことが、他人からするとスゴイことに見えることって、ありますよね。例えば、海外旅行。学生にとっては大きな支出の伴う一大イベントだとしても、海外を飛び回る経営者に見れば、日常の一コマでしかない。例えば、マラソン。ホノルルマラソンに向けてトレーニングしている人にとって、「10kmを走れ」という指令はたいしたことではないでしょうが、運動不足の中年サラリーマンなら相当苦痛でしょう。

あるいは会社の社長と社員の関係でも同じことが言えるかも知れません。先日社員5名の会社の社長が相談にきました。「うちは社員は頑張ってくれているのですが、定期昇給はしていません。やはり昇給の仕組みをつくったほうがいいのでしょうか？給料を上げれば皆、励みになってますます頑張ってくれるとは思いますが、なんとなく不安なんです」

私は答えました。「“業績に関係なく給料が上がりつづける”という幻想を社員に抱かせないことは大切ですが、仮に1人5千円昇給しても、社員5人で月2万5千円、年間30万円のアップです。月5千円アップすることで、社員が生き生きと頑張る年間30万円以上の粗利をラクラク生み出すイメージが持てるのであれば、それもアリじゃないですか？」

毎月数百、数千万円を稼ぐ会社の社長にすれば、月5千円のアップは小さな額かも知れませんが、でも毎月20万円前後を受け取るスタッフにすれば、5千円のアップは大きなインパクトを持ちます。このように、自分にとっては小さなことが、他の人にとってはスゴイこと、って結構ありますよね。そのときに、私は思いました。

「自分が好きで得意な分野のことが周りにとっては大変なことだとしたら、その得意分野でたくさん貢献しておけばどうか。自分の苦手な分野で貢献してもらえて、トータルではものすごく助かるのではないか!？」

つまり、得意な分野で周りに貢献するのは、実はお互いに大変ハッピーなことなんです。

【今月の一冊から】

『もし明日世界が滅びるとしたら、今日あなたは何をするか？』

> 「もし明日世界が滅びるとしたら、今日あなたは何をするか？」あまりにも恐ろしい質問
> だから、皆さんも答える必要はありません。もし読者の中に勇気のある人がいて、「俺は
> どうしても答えたい」ということなら、じっくり考えて正直に答えを出してほしい。明日
> 死ぬという仮定の場合は、まだ理屈の脳が動く。死後の名誉とか残された家族に対して、
> いろいろな配慮が働くからだ。しかし世界が滅亡するとなると、少し事情が変わってくる。
> そういう配慮も一切必要でない無責任状態になれるから、普段は理屈の脳に押さえ込まれ
> ているものが、ここぞとばかりにあふれ出てくるのだ。

(『人生の目的が見つかる魔法の杖』 西田文郎 著 現代書林 P.63 より引用)

今、私は自分の好きなことを仕事にしています。人の相談に乗って、解決策を導き出す。あるいはそのヒントを与える。周りの人々のインスピレーションとなるべく、自らの成長を加速させるために多くの体験や勉強をする。そんな日々をととても楽しく感じているし、今後もいろんなチャレンジをしていきたいと考えています。

そんな私は、以前次の質問をされたとき、回答に迷ったことがありました。

「あなたにとって、仕事と家庭、どちらのほうが優先順位が高いですか？」

私は考えました。「家族はもちろん大切だけど、僕の人生を生きる上で、仕事は重要だ。ミッションに沿った仕事をしていると思えるし、その仕事が大切な家族を支えている。だから、結果的には家族よりも仕事のほうが優先順位が上なんじゃないかな」

そんなある日、この本を手にとり、冒頭の質問(「もし明日世界が滅びるとしたら、今日あなたは何をするか?」)を自分に投げかけ、答えを本の余白に書き込みました。そして、その答えを読んで自分でビックリしてしまいました。

「家族と共に、これまで歩んできた人生の思い出をふり返り、幸せ感をかみ締める」

最後の日をイメージすると、そこに幸せ感を一緒にかみ締めてくれる家族がいなければならぬことに気づいたのです。そう書いた自分が意外でした。それに引き換え、今の自分の時間の使い方は、果たしてどうか? 仕事に集中し過ぎるがあまり、気がつけばロクに家族との会話をしないまま何日も時間が過ぎることはしばしば。まして子供が幼く手のかかるうちは、食事中でも夫婦の会話も表面的なものになりがち。気がつくともう何ヶ月もお互いの考え方や価値観に触れるような深い話しはしていなかったりする。

「おっと、バランス感覚を取り戻さなければ」と気づかされた、究極の質問でした。